

真夜中の憂愁

根来 滯子

深々と夜は更けていく。時計は11時を回った。居間の固定電話の前に座って、受話器をとろうかどうしようかと逡巡している。胸に手を当て心臓の鼓動を確かめる。どきんと大きく波打っている。昼過ぎから鼓動は多少の変動はあっても、打ちつづいたままの状態である。朝から気分がすぐれなかった。顔が火照り、熱っぽい感覚があるが、何度も体温計でたしかめても37度に達することはない。熱はないというべきだろう。しかし、脱力感は激しく、追い打ちをかけるように心臓の鼓動が全身に伝わる。そのうち収まるだろうとソファに横になり、安静にしているが、8時になり、9時になっても正常になる気配はなっていない。めったに感じたことのない一人暮らしの不安が押し寄せてくる。誰に相談することもできない。私しかない。このまま、朝まで待てるだろうか――心筋梗塞？ 盛んに問題になっている独居老人の孤独死という言葉が浮かんでくる。絶対あってほしくない死に方だ。

部屋を歩き回っていたが、冷静に、家じゅうの鍵をかける。保険証やら診察券やらをバックに入れる。財布やスマホも忘れずに。そうしてまた電話機の前に座る。受話器をとろうか我慢しようか、ぐずぐずと逡巡が始まる。心臓に異常をきたすということはやはり、放置できない問題なのだと自分に言い聞かせる。ときどき、息苦しさもある。もはや11時過ぎ、真夜中では申し訳ないではないかなどと気を引き締め、一大決心をして受話器をとる。

「救急車の要請ですか」てきぱきとした男性の声。私の声は弱々しく「はい」と返事をした。住所は、名前は、年齢は、家族は、と矢継ぎ早の質問。「それで容体は」と尋ねる。

身体から力が抜けて心臓の鼓動が止まらない、胸が苦しいことなどを訴えた。

「すぐ行きますから玄関の鍵をあげてお待ちください」

なんとという頼もしさ。さっきの脱力感は消えたような気分です。シャキッと立ち上がり、玄関の戸を大きく開け、上がり框に腰かけ、救急車の来るのを待った。

12時に近い。近所は寝静まつて妙に生々しい星が、満天に輝いている。いつの間にか秋模様であった。私はこれから救急車で運ばれる人であった。爽やかな秋の風景に浸っている余裕はない。

「ピーポー」と派手な音をひびかせて、赤色灯を回しながら救急車が近づいてきた。ダダと2、3人の消防服を着た若い男性が下りてきた。

「大丈夫ですか」「気分はどうですか」

私はまた、心臓の鼓動のこと、息苦しさのことなどを繰り返した。手すりにつかまって立ち上がり、車まで歩けます、ときっぱりと言ったが、隊員は「心臓がおかしいのなら動いてはダメです、そのまま歩いてください」といって、二人がかりでストレッチャーを持ってきて私を抱え、寝かせた。私は歩くこともできない重病人になっていた。

ストレッチャーに寝かされたまま救急車に運び込まれる。待ち構えていた別の隊員が、改めて住所、氏名、年齢を確認する。今日は何日かなどと聞いてくるのである。いは認知症の検査をしているのかもしれない。なしる老齢の一人暮らしなのだ。

救急車は大変に目立つ車体である。深夜とはいえ、両隣に迷惑を掛けたくない私の思惑などに全く配慮が

ないのだ。エンジンをふかしたまま停車し、その場で血圧、脈拍を調べる。血圧は200に近く、脈拍も100を超えていた。正常値をはるかに超えている。その数値を聞いただけで私は呼吸が荒くなった。

盛んに携帯で連絡を取り合っていたが、受け入れてくれる病院が決まったようで、闇を切り裂くような無遠慮な音を辺りにまき散らし、やつと出発した。

随分振動が激しい。寝ている背中が揺れる。上等な車体ではないようだ。3人同乗している隊員は親切なのだろうか、皆それぞれ話しかけてくる。子どもの人数は、何処に住んでいるのか、近所に知人はいるのかなど、職業柄とはいええ、個人情報ばかりの質問で、私が病人でそれぞれころではないというのに、沈黙が気まずいのか、車内はにぎやかである。その妙な陽気さに、私はかつてないほど屈強たくましい3人の男性に労わられ、大事にされていると感覚を抱いた。薄目をあけて辺りを観察しながら眠気さえ襲ってきた。

やがて総合病院の救急専用の入り口に到着した。私はストレッチャーに乗ったまま、病室の中に運ばれた。「我々はこのままですからね、頑張ってくださいね」彼らの励ましの言葉がとてもうれしく、「ありがとうございます」私には3人の救急隊員に心からのお礼の言葉

で答えた。

2、3人の看護師が駆け寄ってきた。私がある病気で世話になっていては馴染みの病院なので安心であった。救急専用のベッドに移され、まずは、必ず全員にしているというコロナの検査をうける。綿棒を思いつきり鼻の奥まで突っ込まれ「痛いッ」と叫んだとたん終っていた。15分から20分ででた結果は陰性だった。

それから諸々の検査が始まる。心電図、レントゲン、超音波、血液検査、尿検査等々。寒がりの私は、秋が始まったばかりというのに、シャツやセーターやらを何枚も着込んでいたのだが、二人の看護師が寝たままの私の身体を起こすことなく、あつという間にすると裸にして病院の衣服に着替えさせてくれて、その手慣れた器用な動作に感動した。きつと、寝たきりの病人をこのように扱うのだろう。私は大げさでなく、呼吸も荒く、ぐったりして全ての移動を車いすで動いた。車いすで他人が移動させてくれるという事は、まことに快適だということを知った。

夜勤の担当医はとても若く研修医のようであったが、私のぐったりした様子を力づけ、心配そうに見守り、病院に来ればもう安心だからねと言葉をつくして励ま

してくれた。同居家族はいないということで、救急の場合の連絡先に記入してある、東京に住んでいる54歳の娘に電話をするという。

「娘は仕事を持っているので心配を掛けたくない、真夜中に電話があったらどんなに驚くことだろう。よほどのことがない限り連絡を取らないでほしい」と声を張り上げて懇願した。彼女の翌日の仕事に差し支えることは明白である。看護師たちはひそひそとはなしあっていたが結局は電話をしてしまったようだった。点滴のために静脈に針を刺すのだが、血管に思うように針が刺さらず、2、3か所やり直し、結局、手の甲に針を刺され、本来なら飛び上がるほど痛いはずなのに、痛覚も薄れ、ぼたぼたと落ちる点滴の様子を見ながら、これが救急医療なのかとすべてルールに乗っ取った手際の下さに感心した。

1時間ほど経ったであろうか、医者が枕元にたつた。「○○さん、色々検査をしたのだけれど、特に悪いところは見つかりませんでした。

脈も90になって落ち着いています。マアあまり心配はないでしょう」

あれほど動悸が激しかったのに異常がないとは。あれほど息苦しかったのに肺も心臓も異常がないとは。

「安心して下さいね。ゆっくり休んだら帰りましょ
うね。よかったですね」と看護師の明かい声。そう
いえば点滴をやっている間、自覚症状は治まっていた。
鼓動も息切れも平たくなり、私は穏やかに横たわって
いたので。でもあれだけ苦しくて、救急車を呼んだ身
になれば、「はいありがとう」と喜ぶわけにもいかない
気がする。さっきの私の重病ぶりはどうしたことか。
安心すると同時に気まずい部分もある。沈黙のあと、
看護師に尋ねた。「私の体調不良の原因は何でしょう」

「さあ、はっきりした原因は先生もおっしゃらないけ
ど、気候も寒暖差が激しいし、この時期、調子が悪く
なる人は意外に多いんですよ。自律神経が高ぶったの
かもね」――と首をかしげる。そうか、考えてもみな
かった「自律神経」という言葉に出会った。正常と言
う数値がでて用済みとばかりに眠そうな担当医はさつ
さと姿を消す。二人がかりで服を脱がせたように、や
はり手さばきよく私は自分の数枚の服に着替えさせら
れた。私は病院に連れてこられた時とはうらはらに自
分で靴を履き、すつと立ち上がった。治療のない患者
を病院に置いておくわけにはいかならない。

異常なしと診断された私は、もはや患者でなく、ベ
ッドに寝る資格がないのである。

時計は2時半を回っている。「タクシーをお呼びしま
すね、お大事にね」それでも看護師は玄関まで付き添
ってくれた。受付で一時金を払い、待合室でタクシー
の来るのを待った。黒いスーツを着込んだ運転手は真
夜中の街並みを走る。かすかに点滅する橙色の街灯。
見慣れたはずの風景がまるで異次元の世界のようだ。

歌心 満ち溢れ来る 星月夜

運転手は深夜勤務が常態化していて、時間に関係な
く不幸が発生する病院に向くことが多いと言う。修
羅場を多く見てきたので、ごく平凡な普通の老女であ
る乗客との会話がうれしいと言った。朝、仕事が終わ
って、酒をのんで寝るのだと苦笑した。人生いろいろ、
生活のリズムもいろいろである。

娘からの電話が入ったのは明け方の5時。娘は1時
に病院からの電話でおこされ、それから一睡もできな
かったとのこと。あれほど連絡をしないでと懇願した
のに、私はただ単に体調不良のために救急車を呼んで
娘にも心配をかけてしまった。――大したことはない
のにすぐに救急車を呼ぶ高齢者が多い――という非難
の声を聞いたような気がする。

複雑な心境で私は深夜の静寂な部屋のソファに座って緑茶を飲みながら朝を迎えた。

翌日、近所の主治医を受診した。二十数年に及ぶかかりつけ医である。綿々と体調不良を訴え、事の経過を説明した。主治医は甲状腺の異常を疑ったようである。血液検査をして動悸をおさえる薬を処方してくれた。結果は甲状腺も異常なし、数値上では私は年相応ではあるがごく普通の健康体であるようだ。言いようのない不安のために、私は救急車をよんでしまった。顔向けできない失敗をしたようで、安心するべきところを、申し訳ないような複雑な気分が数日、鬱々と過ごした。

月に何度か、近所のレストランでランチを一緒にする4、5人の仲間がいる。たわいのない雑談をする気の置けない友人たちである。私はレアな話題として、救急車で病院に行つたいきさつを淡々と報告した。

皆、目を丸くして驚いた。「自分で呼んだの、すごいわね」。「自分で呼んで自分で乗っていったのね。すごい決断ね、さすが一人暮らしの長い人は違うわね」驚かれたり、感心されたり、それでも深刻な状況でなかったことを、喜んでくれた。結局、私の体調不良は何

だったのだろう。原因があるはずである。

「自律神経失調症じゃないの、季節の変わり目だし、寒暖差に体がついていかなかったのよ、脈拍が早かったり、動悸がしたりはまさにその兆候よ」一人がしたり顔でいう。皆同感した。私は自律神経を患っていたのか。

全身のたるさも、胸を圧迫されているような感じもそのせいだ。自分とは無縁と思っていた自律神経の異常が高齢になって初めて現れたのか。はつきりした内蔵や器官の病変ではないこの疾患は、厄介なようである。自覚していない生活上のストレスと、長年の不眠がのしかかっていたのかも知れない。私はしんみりしてしまった。

「不定愁訴かもよ」と別の病名を持ち出す友人もいる。「不定愁訴なんて更年期障害のことでしょ。私達がかかるわけがない」誰かが言って皆笑った。結局何事もなくてよかったと喜んでくれたが、原因の不明な病気もよくあるそうだ。私にとつては大きな経験だったが、心配してくれる友人たちの存在を改めて心強くおもった。

その他、高齢者の不調に「フレイル」という、心身全体が虚弱になる漫然とした病変もあることをテレビ

の解説で知った。「フレイル」に陥らない為に市の行政機関は会合の場を作ったり、体操をしむけたりしているようだが私は参加したことがなかった。張り合ひのない生活を送っていれば「フレイル」にもなるだろうと思われる。その点、ペットに救われている高齢者も多い。私も地域猫に入れ込んでいる一人だが。

日がたつにつれ、閑に任せて救急車を呼んだという行動にたいする私の思考はくよくよと深まっていった。心臓病から誘発される心筋梗塞などの病気を予測して不安に駆られて助けを求めたのか、

「人はどう死ぬのか」という臨床医の書いた、まことにシリアスな本を読んでいささかショックを受けている。

超高齢者が突如の病におそわれたとき、悲惨な延命治療を受けないために、救急車を呼んで病院に行くべきでないというような内容であった。仮に病状が落ち着いたとしても、年齢や病気が快復するわけではないので、そのまま静かに逝くのが宜しいようである。

プロの医者でさえ高齢者の生き方、医療の在り方について真逆の意見を述べたりしている。

どんな啓発書を読もうが、自然の流れに逆らうことはできない。人は生まれてやがて死ぬという大きな時

間の流れに乗ってのんびりと暮らして行けたらと思う。

もつと生きよと語りかけくる星月夜

(2022年 11月)